

東書文庫

児玉 寛嗣

明治通りを田端方面から王子に向かって歩くと東京書籍の本社ビルが見えてくる。この会社は教科書出版の最大手として有名。会社に付設された「東書文庫」という教科書図書館には七万点以上の資料があるそうだ。その展示室を訪ねた。本社ビルから五分ほどの距離にあり昭和十一年に印刷・製本工場の新築の際に併設されて開館した。当時の社長の「国定教科書はもちろん、藩学・寺子屋時代からの教科書や教授書、教育専門書など、今のうちに蒐集保存しておかなければ、いずれ散逸してしまうであろう」との思いから創立されたとのこと。

予約した時間に入館し、所定の手続きを終えると、年配の社員がガイドとして案内してくれるという。展示物は室町時代のものから江戸時代、明治以降へと続く。明治初期には教科書はなく、掛け図を用いた授業だったそうでその実物が展示してある。ガイドによると朝ドラのモデルの牧野富太郎も小学校で本草学の掛け図の絵に魅せられて植物学を志すようになったとかで、NHKのスタッフに頼まれて掛け図のレプリカを貸したそうである。明治時代には教科書は文部省が見本を用意して、認可された会社がそのコピーを作ったとのこと。大正から昭和にかけてものも展示されていたが、親たちはこれで勉強したのかと懐かしさを感じた。

やがて軍国主義が盛んになると教科書もその色が濃くなり、算数では挿絵に書かれている戦車や戦闘機の数を数えるというスタイル。まもなく終戦、所謂「墨塗り教科書」だ。兵隊の出てくるページは全面、真っ黒。まるで役所の公開文書のような。児童に墨塗りをさせたというが子供たちも価値観の大逆転には戸惑いを覚えたことだろう。展示物は昭和二五年の検定教科書初版までである。おそらく、この版の教科書を使ったのだろうが記憶はない。

ガイドのお陰で駆け足だったが教科書の歴史を辿ることが出来た。最後に「ありがとうございました」と言った時のガイドの爽やかな笑顔が印象的だった。